
異世界自衛隊黙示録

文系グダグダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界自衛隊黙示録

【Nコード】

N39460

【作者名】

文系グダグダ

【あらすじ】

これは、我々国家公務員たちによる悠久の時を経た闘いの記録である。

すべては国家、国民の生活の為に……

その中から一人の自衛官の軌跡をみせよう。

尚、外伝として彼の戦いを最初からどの過程で最後まで至ったのかをダイジェストでお送りします。

平成某年 某月 某日 AM13:18

太平洋上を航行中の海上自衛隊
護衛艦「しらなみ」艦内食堂にて

「あー、面倒臭えな。」

食堂で、カレーを食いながら同僚がボヤク

「なんで非番の日に、マグロ漁船探しに太平洋まで散歩せにやなんのだ。」

「まあ、そんな日もあるだろうよ。漁師も休みに合わせてマグロとりにゃあ行ってくれんよ。」

ああ、家で冷えたビールとツマミ食いてえ。 と言う同僚に同情しつつも、黙々と昼食を食べる俺達。

事の起こりは一昨日の事。太平洋上から、日本船籍の大型漁船から救難信号が届いたことから始まる。

直ちに、俺達が勤務する海上自衛隊の護衛艦「しらなみ」がAM00:00丁度に某県より出港、そして今はその救難信号が送信されたと思われる海域にいる。

「まあ、しかし。今頃漁師の皆さんはとっくに魚の餌か……」

一通り、ボヤキ終えた同僚はぼつりと呟く……

「今日の始めから日の出まで、酷く荒れてたからな。この護衛艦でさえ相当揺れてたんだ。恐らくはな……」

余り考えたくはないが、船の残骸の周りを搜索、回収して帰港、報告だろう。

心の中で亡くなった人達へ黙祷する……

食事が終わり、世間話をしていた同僚と共に食堂を出たところで別れ、甲板に出る。

まだ、俺の休みなので、外の空気でも吸おうとも思ったのだが……

「おいおいマジかよ。」

甲板の上では整備の奴らがせつせとチヌークを整備していた。恐らく、遭難者がいたのだろう。

そして、その向こう側では木製のガレー船小さく見えた……

「なんでガレー船がこんな海のド真ん中にあるんだよッ!!」

「青木一曹、そう大声を出すな。」

俺のひとりツツコミに対して上司の一等海尉が声をかける。

「しかし、なんであんなとこにあんなものが……あんなの昨日の嵐で木っ端微塵になってるはず。」

「さあな。さつき一曹がのんきに飯食ってる間に接触を試みているが、未だに音沙汰なし。報告だと、主なマストが根本からぽっきり折れているらしいから漂流船で間違いないらしい。」

「で、そのワケ分からん船調べるためにチヌーク出して調べる訳ですか。」

「そういう事だ。」

「しかし、何故現代にあんな骨董品が漂流しているのでしょうか…？」

「さあな、あとで遭難者にでも聞いてみな。」

さあ、休憩時間は終わりだ。とっと持ち場に行ってこい。と、海尉に言われ、ホントに遭難者にでも聞きに行こうかと思いながら持ち場に戻った。

「私たちを助けてください。」

遭難者が初めて発した言葉はそれだった。

彼らは、あたかも前時代的……いわば中世の騎士のような格好をしていたりしていた。

遭難者は合計4人。全員、革鎧のような物を着て、2人は60センチ程の剣を持っていた。海水や赤いケチャップで若干、輝きがショボいがそれが妙にリアルさを醸し出す。

さらにその中の一人がなんと若い女性で前述の通り革鎧なのだが、他に比べて若干装飾が多く、妙に子供っぽい目をしていた。

先程の言葉も彼女が発した物である。

「……あー、もう一度お願いしますか？」

「え?! あ、はい。正確には、私たちの国を侵略者から助けてください!」

これには流石の海上保安隊もびっくり。

事情聴取をしていた隊員も、偶然警護に居合わせた自分もガクンを肩が落ちた。

「……あー、亡命者ですね。それなら、外務省の方に連絡をとっておきますが……お名前と国籍を一応言ってください。」

出来れば、身分証明書か何かを持っていればありがたいです。と隊員は付け加える。

なんともおざなりというか、気の抜けた対応ではあるが、マトモに返事が出来るこの隊員は正直すごいと思う。

彼女の付き人的な騎士は暗い顔ながらも剣に手をつけようとしているのが見えるけど……

あくまで、手は付けてはおらず、腰に構えたままだが、こちらは内心ヒヤヒヤものだ。

頼むから、左わき腹にいれてある手を抜かさないでくれよ……

「はい。わかりました。リスト王国のエルベ地方代6代目当主シエルフ・ド・エルベです。」

と行った後、今はこれくらいの物しかありませんが……といいながら、何やら紋章が入ったハンカチサイズの赤い布をみせる。

恐らく、A国とやらの国旗とか家柄の家紋的な代物なんだろうなあ・
・と、思っている自分は案外、適応能力が高いようで、実は分かっ
つてはいるんだけど単純に頭がフリーズしてるだけだった。

なんだか自分たちの価値観が一気に音を立てて崩壊するような感覚

だ。

取り調べをしている同僚も同様に頭をかかえている。

その他いろいろな質問を同僚はしたが、いずれも我々の常識とは程遠いファンタジアな内容であり。

そのたびにこめかみを抑えながらもメモをとる。

やがて、取り調べも一段落し、同僚は上司に報告をよこしに個室から出て行った。

退室する際、自分に同情の眼差しを受けるも、同僚も気の毒な役回りをしたということもあるので、「ちゃんと監視はしておく」と述べた後、「済まない」と、一言行って去った。

……しかし、個室に自分一人だけいるのは大変重圧がかかる。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ほらね。自分と4人の異邦人はずっと無言をつらぬいている。

自分は職務上私語は厳禁なので、無言で出入口前に陣取っている。

勿論、ホルスターから拳銃を抜き、手に持ちながらSPのように前に組んでる。

異邦人達は、時折相談しながらも今のところ大人しくしてくれている。

多分無茶はしないと思うけど・・・・・・・・ここで死にたくは無い。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

終始無言状態・・・だが、騎士の格好をした女当主がこちらに顔を向けた。

「あの・・・質問がありますが、よろしいでしょうか？」

うーん、困った。私語は厳禁だが、もし彼女が行っていることが正しいければ、向こうの気を害することになる。そうなったら向こうの護衛の人達も黙ってはいないだろう。

同僚との取り調べを聞いていて分かったことがいくつかあった。

一つは、こいつらはこの世界の人間ではないということ。当たり前だが・・・

二つは、恐らく向こうには貴族制または王政があるということ。これは当主自らが身分を証明するために出した布切れで恐らく確定。で、三つ目は、こいつらは科学ではない技術形態を有しているという事。これは一つ目がこれを証明している。

他の根拠で言えば、彼女たちは顔の色から見て白人だ、こんなに流暢に日本語を話せるはずがないし、当主と護衛との会話は聞きなれない発音が飛び交っていた。

そして、四つ目……こいつらは亡命者だ。
始めの発言で確定。

これらの要素を交えて考えると答えは自然に出てくる。

未知の国との外交問題に第二次大航海時代、もしくは第二の新大陸発見となるだろう。

ああ、これから先…人類にとって大きなターニングポイントとなるのは必須だ。

これらのことを踏まえて自分がとるべき行動は一つ。

「はっ、自分が答えることの出来る範囲でしたら、お答えいたします

しょう。」

ここから、痛くない腹の探り合いの始まりだ。

上官にどやされること必須だが、聞き出せる範囲の事なら、根掘り葉掘り聞き出すしか無い。

■ ■ ■

痛くない腹の探り合いとデカイ口を叩くがそんなに言うほどシリアスでも無かったということが、この質疑応答の後の自分の感想であった。

例えば、「この船は大変乗り心地がいいですね」とか、「その服何で作られていますでしょうか?」とか、「ここは軍なのですか?」とかまあ随分軽いジャブであった。

自分も彼女の質問には、できるだけ誠意をもって答え、微妙な質問にはきつぱりと断っていたり、「専門外です」と煙に巻いておいたりもした。

勿論、政治・経済・法や技術に引っかけたりそんなことや世界の状況・生活水準なども曖昧にぼかすか、少しだけ答えたりもした。軍事関連はもつてのほか口外してはいない。

ただ、彼女の待遇や移動の時に恐らく目にするであろう事柄は事前知識として言うておいた程度である。

まあ、こちらの知的財産の損失は自身の評価ではあるが軽微な物にとどまったと言ってもいいだろう。

逆にこちらが手に入れた。知識のほうが重要だ。

まず、何故助けてもらうかの理由。

どうやら隣国に攻め込まれているらしく旗色は少し悪いとのこと。しかし、彼女の収めている領地は、攻め込んだ隣国との国境沿いにあるらしく、恐らく持ちこたえている事は明らかではあるらしい。何故言い切れるのかと、問いてみたが、流石は貴族様。

そこは、「本陣と近衛は強者ぞろいですから」とぼかされる。

本陣は、各領主の手勢ではなく、恐らく王の所持する軍隊のことで、近衛は王直属の部隊、特殊作戦群か空挺部隊あるいはレンジャーみたいなエリートなのだろう。

他にもいろいろな話をしたが、どれもこれもたわいもない話で、重要度は余り少ないはず・・・

勿論、この他に重要な事柄はあったのですかさず覚えてはいる。

始めのうちのうちは恐る恐るだったが、彼女もだんだん打ち解けていたようで、ここでやったんだの表情をみせる。

言うことは言うけどまだまだ子供であると実感すると同時に、向こうの世界に少なからずの不安を改めて認識する。

付き人は以前自分に警戒を解かないが、まあ仕事柄仕方がないと、割り切り、いつでも拳銃が抜けるよう、ホルスターの留め具は外したまま、セーフティが外れ、チャンバーに弾が装填された状態で置いていたのだった。

■ ■ ■

「例の異邦人の件についてだが、外務省の方から連れてこいと言う結果だ。補給を受けながら、横浜に行き、そこから陸路で外務省へ直接向かうんだとよ。」

彼女との会話が終わったあと、同僚と交代して、上司から今後の対応聞いてみると意外な返事が帰ってきた。

「報告では、結構友好的な関係に築けたようだな。」

「は、はあ。」

「君が聞き出した、情報は我々にとって不可欠な物だ。そして、異邦人とのコミュニケーションを少なくとも君は円滑にすることが出来る」と証明された。」

どうやら、向こうで自分がやらかしたことも報告しているらしい。内心ヒヤヒヤしながら上司の言葉を待つ。

「異例だが、今日付けで君は彼らと一緒に外務省に向かってほしいとの事だ。」

はあ？ 幾ら何でもあり得なさ過ぎる。不可能だろ。

「不満そうだが、まあ、国家権力ってやつだ。諦める。」

そう、これが、自分に・・・いや、国家としての重要なターニングポイントとなるきっかけだったのだ。

航行を終え、横浜某地にて不本意ながらも下船となった自分は滅多にない光景を見た。

「ふむふむ、ほお・・・」

横浜で出迎えたのは、背広組と制服組の護衛だ。

ご丁寧に外交ナンバーの業務車三号古いクラウンではなく最近流行りのトヨタ・プレミオだ。勿論(?)黒で、窓はスモークガラスの。

「これはこれは、長旅、お疲れ様です。」

と、さつきから何か言ってるのはまだ俺とあまり変わらない歳のくせに良家の爺さんみたいな態度をとる男。

こいつが外務の人間だというのは人目でわかるし只者ではないともわかる。

「それでは、こちらに」

と、シエルフを誘導するのは制服組の人間。

「君も彼女と一緒に乗り込みたまえ。」

自分も違う制服組の重鎮に諭されて、彼女が乗り込んだ後に乗り込む。

助手席に外務の男、その後ろに制服組、その隣にシエルフ、彼女を挟むように自分が座り、運転席が制服組の陸尉が乗り込む。

彼女の護衛とはここでお別れである、ざまあ。

■ ■ ■

「すごいです！ アオキさんの国は！」

外務省からの帰り、某駐屯地に向かう際の業務車三号の車内で、自分と二人きりになった途端、堰が切れたように興奮気味に喋る運転手もいるんだけどなあ・・・ミラー越しに見える陸士は顔色ひとつ変えなかったが、ミラー越しに視線が合うと、苦笑気味。

” 相手してやってくれ、多少の雑談は目えつむつとくから。”
と言われたような気がした。

因みに、今では彼女の事をシエルフと呼び、彼女はアオキさんと呼んでいる。

そして、しきりにスゴイスゴイを連呼する彼女の話が終わったのが、某駐屯地について、運転手がエンジンを切った時だった。

「これはこれは・・・」

彼女との会談も終わり、外務官僚である田中は思う。

『まさかこのような形で、私の夢が叶うとは・・・』

青木の予想通り、彼と同年の若者である田中は、実は外務省事務次官に上り詰めたまさしく真正正銘の天才である。

だが、これまでの道のりは遠く険しいものであった。
常人の想像を絶する、猛勉に加え、心理学や、とにかく積極的に駆け引きに望んだ。

学生時代は、必ずどこかのグループや学生・生徒会などの役職を務めるだけでなく、彼は自身に一つのルールを加えていた。

『出世は必ず叩き上げ』

という、他人にとっては訳のわからなすぎるルールを。人生の縛りプレイなんて無理ゲだろ。

だが、それこそが彼をここまでの地位に上り詰めた最大にして最悪の理由。

上の好感度を上げ、同僚の信用を得、時にはライバルを叩き潰す。

そして、最後には一番上を完膚なきまでに蹴落とす。

下にいた時から、コネや人材、情報などを集め、時には嘘を、時には噂を、そして時には暴力的な妨害まで……それは標的自身ではなく、その周りや家族にまで及ぼす程に……容赦なく、かつ真綿で首を絞めるように……まさしく繊細かつ大胆に。

だから、彼は表向きはとても穏やかで大変上品だ。

『それに自衛官・青木……彼とはいいパイプラインつくるべきだな。』

ほかに、もつと発言力を強める為、彼は本来数十年かけて、行うはずだったある計画を見直し、人間関係づくりの……所詮コネクションサーチの見直しや、いつでも上を蹴落とす為の準備を進めた……

■ ■ ■

某駐屯地にて、上司からの待機命令を受けていた、自分は相変わらず、異国の姫様とその取り巻きのコミュニケーションに努めていた。

勿論、知的財産を守るよう、上司には言われた。

なので、コミュニケーションとは良く言うが、自分にとってはタダの腹の探り合いをしているだけである。

まあ、ただのつまらない話一つでもこの姫様は興味津々に聞いている。

どーも、この姫……典型的な箱入り娘ってやつのもうで、こっちは、想像よりも簡単にいろいろな情報を聞き出せていた。

まずは、言語。

これは、異世界においてもいろいろな言語・文字は存在し、少なからず亀裂や軋轢あつれきはあったのだが、それは太古の昔。

魔法使いが伝承において登場した時代にはその問題は解決されている。

その理由としては、彼女が下げているネックレスについての指輪と関連している。何故なら、その指輪は一種の自動通訳システムだというのだ！

原理はよくわからないが、これがあるので彼らとの言語上の問題があっさり解決したらしい。

しかも、その手のアイテムは比較的簡単に量産が可能で、試しに腕時計を渡してみると、彼女はそれに何か光のようなものを入れた。そう、時計をもった手とは違う手からビー玉程の光球を出し、時計に近づけると、時計は光球を吸い込んだのだ。

で、彼女から返された時計を付け、彼女の取り巻きに話しかける。

「ど……どうも……言葉は通じる？」

「ああ、問題ない。初めまして……だな。」

おいおいマジかよ

今まで言葉が通じなかった騎士たちだが、なんとみんな会話が出来

るようになったではないか！

と、感動に浸ってはいたが突然の同僚からの呼び出し、どうやら電話らしいが……

とりあえず、彼女たちには説明を言い、その場を離れた。

■ ■ ■

○月○○日AM7:00

某駐屯地

演習場の一角にて自衛官達が慌ただしく動き回っている。

ある一団はLAVや高機動車を入念に整備しLAVにはM2重機関銃やMINIMIが取り付けられ、またある一団はアパッチやチヌークの整備に追われていて、それらの一団から離れたところにおよそ一班の陸士達と騎士達が円上に配置に付いている。彼らはお互いに死角をカバーし合っていて、彼らの足元には何か幾何学的な模様が地面に書きこまれている。

そして、いま自分はその一団にいたのであった……

「いいかつ！！ 諸君等は足元にある転移魔法で、ファンタジー世界に行くことになる！！」

端からみると、訳の分からない言葉を小隊長は言っているようだが、残念ながらホントの話……

「転移先は、その嬢ちゃんが言うには、籠城先の遺跡の一室だ。我々はその遺跡を抜けて、後続が来れるようなしこを確保。そして嬢ちゃんと愉快な仲間たちがここの魔方陣とリンクして後続を転移させる。わかったか！？」

「「「「「レンジャー！！！！」「」「」「」

「れ、れんじゃー」

勢い良く叫ぶ隊員とそれに遅れる形で女性隊員（WAC）姿のシエルフが恥ずかしそうに言った。

周りの隊員と自分はその様子を微笑ましく見ていた。

一方護衛の騎士たちも慣れない迷彩服だが、それは仕方のないことなので割愛。

「青木 は めのまえ が まっしろ になった ー！」

「これは……すごいものですな。」

そう呟く彼は驚きを隠せない。

地面の魔方阵が光り輝いたと思えば、瞬く間にそこにいた一班が消えたのだ。

「さて、頼みましたよ……私の為、ひいてはこの国の為に……」

外務省事務次官 田中は静かに見守っていた……

自衛官青木、最初の災難が始まった。

第三話

「て、転移終了しました！」

「…制圧!!」

転移魔法が無事、終了し目の前の一室を制圧にかかる。
だが、我々の目の前に広がっていたのは大量の血痕だった。

「……異常無し。」

「…異常無し……」

「異常無し、こんなこと……」

「ひでえ有様だ…異常無し……」

隊員達は初めての惨状に顔をしかめながらも一室を無事、確保する。
その頃には、自分と隊員達の顔は険しくなると同時に自分が死ぬかも知れないという事実が目の前に突き付けられているを知った。
一方、シエルフや騎士達は黙祷を捧げていた。

「……さあ、行くぞ。誰か二人、先行するんだ。」

「了解。」

「り、了解。」

やがて、隊長が指示を飛ばし、一行はまず遺跡から出ることにした。それから、この遺跡はもう制圧済みなのか、敵も味方・・・は、当たり前だが遭遇せず、無事に近くにあった丘陵を確保する。太陽の位置から見て、お昼過ぎのようだ。

「丘陵、確保!!」

「ほら、魔方阵をここに仕掛けてくれ!!」

「は、はい!!」

丘陵を確保するやいなや、矢継ぎ早に指示を飛ばす隊長。

ある者は木に登り、双眼鏡等で見渡し、またある者は装備の再点検をしている。

それ以外の自分含めてすべての隊員は、事前に持参しておいた麻袋に土ういれて土嚢づくりに励んでいた。即席の防御陣地である。

後続の部隊に配慮して1、2方向しか作らないが……

「この土嚢、どっちに置くんのだ？」

「東の方に積んでくれ。」

「袋、持ってきてくれ。」

「あいよ。」

「この穴は随分深くなったな、他のところから掘ろう。」

まあ、そんな感じで腰までの深さの穴に40～50センチ程の高さになるまで土嚢を積み上げMINIMIやM2 50・calでも乗っければ簡易トーチカやMGバンカーの出来上がり。

そうこうしているうちにまた目の前がバルス！！な事になり、瞬く間に

おなじみのものと陸士達が送り込まれる。トレッキー大歓喜である。今度は、狭い密室ではなく広大な木の少ない、丘陵であるため、転移魔法（厳密に言えば召喚に近いらしいのだが、説明したいのも山々だがまたの後に…）が拡大、機動兵器の転送が可能になった。

具体的に言うと今、自分の目の前にはとか、需品科・設営装備満載の7tトラックとか7tトラックとか7tトラック……あれは人員か……あ、ヘリのUH-1がある。退役してるはずのB型だが2機あるし、もう一つの7tトラックには64式81mm迫撃砲と107mm迫撃砲がたんまりある。あと弾薬と弾薬と弾薬……

少し旧式なのがネックだが、なるほどこれなら調達しやすい。ヘリがわからない人はベトコン映画でも見とけ。つかウイキレ。

「第二次派遣中隊、到着しました！」

「了解した。こちらはまだ問題はない、本部はこれからどうするんだ？」

「はっ、これから確保した地域を即席の基地に設営するとの事。建設用重機や資材の到着まで、ここを維持せよとの事です。あります。あなたが小隊はこれより中隊の指揮下に入ってもらいます。」

「そうか了解した。第一次派遣部隊小隊は中隊の指揮下に入ります。」

以下、中隊長と小隊長のやり取りの一部でした。
こっちは相変わらず穴掘って土嚢作ってるがな！！

「各自、魔方阵から速やかに散開！！」

中隊長から指示を受けた各小隊長の指示を受け移動するトラック、人員、迫撃砲、飛び立つ2機のヘリ。
各員、速やかに展開し月あかりの下、ひたすら設営に尽力するのであった……

第二次派遣部隊数時間後……

それはある意味誰もが予想していたことであつた。

「各員、第一級警戒態勢！！」

各小隊長から告げられる怒号、陸士達に緊張が走る……！
延々続くかを思われた穴掘りから解放され、持ち場につこうとした俺だが、小隊長から中隊長のいる天幕に行けといわれたので渋々行くことに……

そこでは、ヘリから報告を受けた通信係と数人の小隊長、そして中隊長のと今回特例で臨時陸士となったシエルフ以下、近衛騎士の生き残りである。

「シエルフ臨時陸士、どう思います？」

「恐らく、妥当な時間です。」

「戦力は？」

「ジエイタイの存在は知られていないので、歩兵主体ですね。」

「いや、それも大事だが、そもそも自分たちは戦う国ってどんな国なんでしょうか？」

俺の発言に同調するように中隊長も「どうなのかね？」と言う。

「相手はセルジア王国、二年前の飢饉で食糧危機に陥ったとき、軍拡政策で数多くの民を大量の兵力に変えて、隣国に宣戦布告したわ。」

食う飯が亡くなると大抵戦争が起こるとは言っただけだが、異世界でもその法則は成り立つようだ。

因みにこれ、統計学で実際に証明されてるらしい。高校時代の友人で今はその道の助教授やってる人から聞いた。

「隣国は奮戦しましたが、敗戦。領土と食料、そして民というものの兵力をさらに得たセルジア王国は今度は我が国、リストに攻め入りました。」

各小隊長達が固唾を飲んでシエルフの話に耳を傾けている。

「そして、首都ゴールドレイクの近郊、エルベ川に隣接するエルベ地方にまで敵が……」

「いや、もう良い。ありがとう。」

シエルフが暗い顔をし始めたのをきっかけに中隊長が止めに入った。
「あれ？確か最初は国境沿いとか言ってたんですけど？」

首都国境から近すぎだろ……と、思ったらロシアも国境から近いとこに首都あんじゃんと思ひ、喉元まで来たツツコミを引つ込ませる。

「それでは、引き続き近衛騎士に話をしてもらいましょう。」

一方、俺は近衛騎士に話をふるのであった。

「はっ、恐れ多くも、各將軍殿に説明させていただきます。」

とかしこまった風に言う近衛騎士、残念ながら男である……

中隊長や各小隊長は苦笑気味に頷き、「我々は將軍ではない。ただの自衛官だよ。そんなに畏まらなくていいから」と中隊長は一言入られてた。

「セルジア王国は、平民主体の歩兵が殆どを占めていますが、火の術法を使う魔術師と土の魔術師が火力の大半です。」

「歩兵もバリエーション豊かで、軽装で剣を使って戦う軽装歩兵や、大きな木製の巨大盾を持つて、弓から味方を守る防御兵。そして、集団で弓を撃ち弾幕を張る弓兵がいます。」

「これらは、現地徴用された平民や自国の平民で構成されており、本国の軍隊は主に重装歩兵と馬を用いた騎兵、そして先ほど申し上げた魔術師です。」

うーん、わかりやすい。

「質問だが、いいかな騎士殿。」

「はっ、いかがいたしましたか？」

「火と土の魔術師について詳しい説明を求む。」

小隊長の一人がそう口にする。

「はっ、火の魔術師は基本的にはファイアボールによる射撃を基本としており、弓の射程ほどあります。熟練者になればファイアボールは槍一本分の爆発伴なうことも可能です。」

威力がペーパーな擲弾銃のようなものか…

ファイアボールが基本と言っていたので他にもあるようだが、一般的な魔術師はそれか火を起こしたりする程度らしい。

「土の魔術師については主にゴーレムを生成し、ゴーレムによって敵を倒します。その他はゴーレム生成の時の応用で土の壁を作ったりするぐらいです。おもに後方支援に特化しているのでよく指揮官も兼任しているケースが多いです。」

ふーん、指揮官が魔術師も兼任しているのかなんだか、生まれの格差の他に魔力格差みたいなのもありそうだな……ほら、ランクと適正で分けられててさ……「お前は、魔力たけーから能力足らなくても出世な。おめーは魔力ねえから能力あっても出世なんてねえから……！」

……あれ？なんかそんな話あったような……

まあ、それは置いてとにかく士官を叩けばどうにかなるらしい。

「オブザーバー1から連絡、残り30秒程で重迫撃砲の射程範囲に入るとのこと。兵力は多数一つにまとまって行動している模様」

「よし、諸君。これから先、君たちは戦場に足を踏み入れることになる。覚悟はできたか。」

そう、険しい顔をした中隊長。

天幕にいる通信係の陸士を含めた俺達は静かに、力強くうなずいた。

……とここで、悲しいお知らせがある。あ、因みにもう戦闘終了後な。

結果は、敵の撤退。

107mm迫撃砲の音と着弾時の爆音で大半が逃げてしまった。

中には突っ走ってくる勇気ある奴もいたが、残念ながらこちらが目視する前に爆死した模様。

だって言ったセリフが

「目標！！敵歩兵大隊、距離500！！」

「迫撃砲、撃てッ！！」

「だんちやーく、今ッ！！」

爆音の後……

「次弾装填！！」

「機関銃手、狙撃手射撃準備！！」

「各陸士、警戒態勢を維持!!」

・ ・ ・ ・ ・

「オブザーバー1・2より連絡、敵歩兵大隊撤退しました!」

「……総員、第二級警戒態勢・ ・ ・ 残党の奇襲に備えろ。」

以下、終了。

これではせっかくカッコいいことだった中隊長もシネマチックにそれっぽく対応した我々も肩透かしである。

まあ、犠牲無しなのは素直に嬉しいが……

シエルフ以下騎士達も「うわぁ……」とか言っただけで啞然としてたし。

そしたら、また視界がバルス!! な事になり、魔方陣をみるとトラックとかトラックとかトラックとかはそんな大量には流石にないが、重機と施設科の連中、そして弾薬弾薬燃料弾薬弾薬……

「第三次派遣中隊、到着しました!」

トラックと弾薬送り込みすぎだろ……

「シエルフ臨時陸士殿、帰還用の魔方陣の設営に取り掛かってくれ。」

「はい!!」

また、土嚢詰みと設営の時間が始まるお……
そして、作業は朝日が昇る頃には……

「オブザーバー1・2より連絡、敵歩兵大隊接近！！数は前回より多数！！」

陸士達に緊張が走るッ！！

以下士官とシエルフとその関係者で自分は中隊長のいる天幕へ……
本来は自分……最近試験受かって、三等海曹なんですがね……今は
一等陸曹だが……

事務次官補の田中が裏で手を回していつの間にかこうなってた。

「ついさっきと同じ戦法でいくぞ。だが、もしも突破された時は……
…覚悟はいいかッ！！」

そして強く頷く我々、それにしても中隊長がイケメンすぎる。もう
中年オヤジなのに……

そして、飛び交う各隊長からの指示、89式を握り締めシエルフの
護衛にあたる自分。

「迫撃砲、用意！！」

「目標！！敵歩兵大隊、距離600から700！！」

「迫撃砲、撃てッ！！」

「だんちゃーく、今ッ！！」

爆音の後……

「次弾装填！！」

「機関銃手、狙撃手射撃準備！！」

「各陸士、警戒態勢を維持！！」

「オブザーバ2より連絡！！敵歩兵大隊、損害！！尚も前進中！！途中、対空射撃を複数受けたものの、射程外につきオブザーバの損害は無し！発射元は敵歩兵大隊左翼後ろ！」

対空射撃「ファイアボールと見て間違い無いだろう。」

「目標、引き続き敵歩兵大隊、左翼後ろ。」

「次弾、撃てッ！！」

そして鳴り響く発射音……後の爆音。

「オブザーバより連絡！ 敵歩兵大隊またも撤退！！」

「重機関銃手、射撃開始！！追い打ちをかける！！」

50口径の重い射撃音が相手に恐怖を植えつける……ッ！と、いいな。

「……総員、第二級警戒態勢……次の襲撃に備えろ。」

そして光りだす魔方阵、全陸士が「うおっ、まぶし！」、そして届く資材と兵器、いい加減増えつつあるトラック、それを帰還用の魔方阵に送り返す陸士。

「第四次派遣中隊、到着しました！」

無限ループ乙としかいいようがなかった。

異世界自衛隊黙示録00「始動」

「始動、異世界自衛隊黙示録」

異世界、それは剣と魔法に満ちた世界だと言えばさぞ綺麗に聞こえるだろう。

中世ヨーロッパレベルの文明といい、手品師も真つ青な魔法といい、現代科学の総力をもつてしても解明できない技術といい・・・
素晴らしい。

ああ、こんなマンガ・アニメでしか味わえないような世界を堪能しているって……

「実に……最悪だ。」

。一式、てえー！！ の掛け声と共に前にいる石の人形、ゴーレムが爆散する。そしてそのまわりに居た、魔道士や兵士は爆発のよる熱風と、衝撃波によって命を落としたであろう。

「アアアアゝ！！」

内藤が撃たれた、衛生科ア！こっちに来てくれ！

また一人陸士が敵に魔法による攻撃、まあただの火の玉だが、そいつを喰らって肩が焦げている。

まあ、あの程度なら1ヶ月で戻ってこれるだろう。

「おい！！通信よこせ、トーチカア！ そちらから二時の方向に食

らわせろ!!」

「了解!」

仲間を撃たれたことによって激昂した陸士がトーチカの射手に連絡し、射手はこれを支援する。

パパパンと乾いた音を出す。89式や64式と違い。

ズドドツと表現するに相応しい音のM2重機関銃は、対人にしてはいささか過剰威力な12.7mm弾頭撒き散らす。

伊達に約60年前にミンチチョッパーの愛称でも言われたそれは、あつという間に魔道士と護衛の一段をグチャグチャにする。

「うわー、こりゃ当分肉類は食いたくねえな。」

双眼鏡で偶然その様子を目指してしまった俺は軽く苦笑いしつつも敵の指揮官を探す。

「お、いたいた。」

案外早く赤い布で装飾された一団が見つかり、最寄の通信科から無線機で指示にかかる。

「野戦特科1班、敵指揮官!10時の方向400、撃てッ!!」

81mm迫撃砲の発射音が聞こえたのち、運良く双眼鏡の向こうにいた指揮官は榴弾によって消し飛んだ。

「命中!!撃ち方やめ!!」

状況としては敵は前列と後列の二列に別れ、前列はゴーレムと重装歩兵（見るからに重そうな装備だったため）の混合部隊と後列は弓兵と騎兵の混合部隊、魔道士は適当な位置にとどころいる。

それぞれ共に200騎ぐらい（こちらの仮称、現地の言語では表現しがたいので。なお1騎＝10人規模）魔道士は10騎程。

対するこちらは普通科中隊に野戦特科（砲兵科）を多めに加えた増強一個中隊300～400人程だ。

開幕は前列が防御力を活かしてじりじりと前進、しかし我々は自陣を塹壕と土嚢とコンクリで固めたトーチカで応戦、完全に接近される前に戦力を削ぎ落とし、前列の戦力は半分以上、魔道士も半減した。そして、後列の指揮官に迫撃砲で砲撃、精鋭を削ぎ落とし、指揮官をビビらせて士気を低くする筈が運良く指揮官を葬った。

しんと静まりかえる後列部隊。

しかし、指揮官の仇と言わんばかりに全騎兵がこちらに突っ込んできた！！ 弓兵はズスコと退却してくれたのが救いか。

「昔ながらの騎兵突撃だ！！ 弾幕を切らすなよ！！」

と、全部隊に送りながら思う……

この世界は……地獄だ……

異世界自衛隊黙示録 01

異世界自衛隊黙示録

自衛隊 某駐屯地にて

「ああ、休暇が欲しい……」

某駐屯地を任されてはや数週間が経過した。

その間俺はトイレの時以外はもうずっとここにいる。食事は作業デスクとは別の接客用のテーブルでとり、睡眠はそのソファで1〜2時間。それ以外はずっとデスクにかじりついている。

その原因とは、

「青木駐屯地指令殿。」

「今度そんな口叩いたら銃殺刑な。」

「青木三尉殿、新しい書類が来ました。お願いします。」

まあ、所詮デスクワークって奴だ。

最初の方はまあこんなやりとりでは無かったが、つい最近ではこんな会話がデフォになってしまった。

こんな会話が成立するのもここならではの。本来は殿なんて呼びません。

「デスクにかじりついても、まだ山のように書類があれば誰だってやってらんなくに決まってやがる。」

畜生、上層部の連中め。

俺がとうとう目障りなってきたのか？ 社会のイジメってレベルじゃねーぞ。

だいたい、俺の階級でこんな仕事はオーバーワークだろ常考。労基署にでも駆け込むぞ。

あ、でも公務員だから無理か。

そんな事を考えながら、書類に目を通す日々。

時々書類を届ける陸士や同僚が哀れむような視線をしてるけど気にしない。イタイ子みるような目をしてても気にしない。

だって、書類がドンドン溜まるからネ。

さて、書類書類。

えーと、輸送科からの物資の書類に中隊の再編に個別にたのんだM2の弾薬とコンクリートと、部下からの報告書。

えーと、防御陣地は8割が完成して、前回の襲撃ではその1割が崩れたが、修復完了してまた構築えお再開したと。

敵の兵士の死体はもう火葬を完了してゾンビ化の恐れなし、と。

弾薬庫の備蓄が、要注意のラインまできてる……は今日きた物資でなんとかなるからいいが、MINIMIの部品を追加で上層部に要請だな。

で、相変わらず装甲車両を寄越すよう言ってるが、相変わらず待てと。

そして、来週中にはまた物資と一緒に新入りがやって来て……と。

新入りはなあ……あいつらビビりすぎて弾薬を馬鹿みたいに消費しやがるからなあ……

弾薬・物資は無限じゃねえんだよ。銃も部品も無限でもねえんだよ……

……まあ、撃たないよりマシだがな……死傷者も少なくなるし。

あー、メンドくせえマジめんどくせエ。

なんで、こんな事になっちまったんだ。

俺が異世界の現地民と最初に接触したのが悪かったのか？

それとも、異世界発の戦闘をおつ始めたから悪いのか？

ゾンビ化した同僚を撃ったからか？

畜生、神め会うなら一発殴り飛ばしてやる。

デスクワークに励む青木三尉を見た同僚は後にこう言っている。

「あいつ……目が死んだまま動いてる。」

「目に光を感じられないどころじゃなく精気すら感じ無かった。」

とにかく、前線でのデスクワークは大変なのであった。

終われ

異世界自衛隊黙示録02

つい先日、上司の一佐（ここでは一等陸佐の略称）に医療品の要請を頼んだらこんな返事が帰ってきた。

「医療品の補給はいつも通り、週末まで待ってもらうとして……代わりに君のとこの衛生科にリスト王国の魔術師が来るから。」

「はい？」

「だから、医療品の節約の為に……サクリファイスとか生命の水とかシャッタースタッフ使える奴寄越すから、そいつで当然我慢してくれ。」

「……………了解しました。」

「恐らく、着く頃だろうからくれぐれも日本の不利益になるような事はするな。本国では高位な職だそうだからな。」

「……………ロープってどこにありましたっけ？」

「と、言う訳で衛生科の諸君。周知の事だが、もし何かあったら、君たちには現実からの転属が決まるだろうからくれぐれも粗相をしないように。」

ロープと革鎧を装備した術師を衛生科に紹介した後、一応釘をさしておくことにしたが……

クソ、まともに誰も聞いちゃいねえ。

お前らそんなに美人のエルフが大好きか？ すっげえ顔に出てるぞ。いつの間にか医務室の外にも陸士が溢れてきているし。

おい、業務は？ 点検はどうすんだ？

……とりあえずお前ら全員飯1サイズダウンな。

あー人員が増えたから、食料を節約しないとなー（棒）

ほかの陸尉・陸佐は、絶対にマネするなよ！！

数日後……

「青木駐屯地指令殿。」

「今度そんな口叩いたら銃殺刑にすつぞ。」

そして今日もまた部下から送られる書類と格闘している。

医務室にいるあの術師はうまくやってるだろうか？

まさかうちの陸士がアホな事やっては無いだろうな……と、少し不安げながらも黙々と作業をすすめる……

「っ！……」

あーあ考え事しながらするから……指切っちゃった。

何故か無意識に紙の薄い所に指の腹をのせてシュッ！……うつつ、考えただけでも背筋が凍る。

「さーて絆創膏、絆創膏。」

ゆびを けが してしまつては しょうがない。

いむしつに いかなくてはな。

術師の様子を見るのも、上司の勤めだよね（棒）

「おーい、指切っちまった。絆創膏くれないか……」

「ミズラちゃん。ケガしたんだ、お願いするよ。」

「何言つてやがる、俺が先だ。」

「俺が先だ。」

「俺が一番重症なんだ、俺が一番だ。」

医務室に入った途端、空気が変わった。

陸士達はどこ以上に興奮して、何故かどこかしらケガをしてる。擦り傷やら切り傷やら、あぐくの果てに頭に矢が刺さった奴まで。それを治しにミズラちゃん（愛称）の所に群れているわけで……

「えええ、え〜と……」

まああの術師の方は常人より尖った耳をピコピコさせながら、ひたすらオロオロしてばかり。

つか、さっきから美人のエルフとか言っているが、容姿も中身も16歳の少女だけど気にしない。俺達の誰よりも年上（160歳）なのも気にしない。

衛生科の連中も陸士達^{バカ}を押しつけてくれているが、非番の陸士も混じっている。数で押されている。

つか衛生科の方も何気にアピールしてやがる。

……もうヤダ、こいつら。

「だいたい、お前非番のクセにどうやってケガすんだよ。」

「おまえこそ、仕事はどうしたんだ。」

「俺はケガしたからここに来てんだ。」

「うるせえ、どうせ女つ気のないWACから逃げてきたんだろ。」

「おまえこそ、そんなに女の子に介抱されたいならそっちにいけ。」

「猛獣を愛でる趣味はない！俺は愛玩動物を愛でるんだ！！」

あ、興奮した陸士^{バカ}達が禁句を！！

「だあれが猛獣ですって…？」

「そんなに女が好きなら……可愛がつてあげようね」

ああ、非番のWAC（女性自衛官）に会話を聞かれた…

これでミズラちゃん争奪戦は衛生科+WAC対男性陣の構図になり
一気に形成が逆転する。

説明しよう！！ WACは通常の自衛隊員よりも3倍の戦闘能力を
誇り、特にこのような条件下ではWACの戦闘能力は通常のそのの
さらに3倍となるのだ！！

「そんな、お姉様方ったらジョークヨ、ジョークぎああああああ
あああ！！」

「ほうら、遠慮しないでいいのよ。」

「すまない悪かった、この通りだうあああああ!!」

「お願い後生だから…グワアアアアアア!!」

なんてことだ。あれ(WAC)が、人類の最終形態なのか!

「ぜ、全滅? あれだけの陸士が全滅? 3分もたたずに…なんという、なんということだ……」

まあ、わかってたが…

アホは事は言わないに越したことはないな。

「ゴメンなさいね、ミズラちゃん。この子達は、おねーさん達がたつぷり締めておくからね」

「あ、す、すいませんでした……」

「いいの、いいの。じゃあねー」

ニコニコ笑いながら、医務室を去っていくWACに自分と衛生科と術師はただただポカーン・・・
なんかケチャップ付いてたような気がするけど気にしないでおう。
そうだ、陸士なんて居なかったんだ。そういう事にしておう。

「……………」

「……あ、絆創膏取ってくれ。」

「り、了解しました。司令殿・・・」

女恐ええ・・・

で、結局の所「どこほつつき歩いてんですか一尉!」という。同僚の呼びかけにより今日もまた書類二個中隊を片づけるのであった。終われ

異世界自衛隊黙示録02（後書き）

あらすじ

美人エルフキターッ！！

部下はちょっとかわいそうな子だった

女性自衛官の折檻♪

案の定怒られてやんのｗｗｗｗ

以上、オワリ

異世界自衛隊黙示録03（前書き）

今回は少し内容がヤバげなので事前に警告。

今回は過剰なネタ、ヤバい表現・パロディ・その他不謹慎な表現が含まれています。

もう一度言いますが、これより先は休日洋酒入りチョコを紅茶のつまみに食っただけで、気分が良くなった（酔っ払った）作者が、もう一昔前のノリでうっかり書き上げてしまった作品ですので（実話）、読むときはそれなりの覚悟をして下さい。

マジで後生ですから……

異世界自衛隊黙示録03

それは某年某日のことである。

今日から一週間だけだが、中隊は日本の土を踏める。

安松や奥代、その他もろもろの隊員達は皆、実家に戻りつかの間の休息を得ている。

安松に至っては「よっしゃあ！！」「ミケ逝けるぜえ！！」と訳の分からない言葉発しており、現在都内某所にいる始末。
元氣有り余りすぎだろ・・・

で、肝心の俺はというと・・・・・・・・

「最近、魔術師が行方不明になってるらしい。」

防衛省の背広組の方々の直々のお呼出を食らったのでした。

「規模は？」

これから楽しい楽しいお休みの時間なのにと文句言っても仕方がなく、敢え無く頭を仕事モードに切り替えて話を伺うことに

「人数じたいは大した数ではないが、それなりに力を持つ魔術師らしい。」

「それ以外での特徴は？」

「分らん。国や人種、その術師の得意な系統も様々だ。」

「はぁ……」

「君は……以前休暇が少ないとボヤいていたそうではないか。慰安旅行はどうかね？勿論、代金は外交機密費から全額だそうではないか。」

結論、背広組といえどもやはり自衛隊の一部なのであった

それに、異世界での働きは正直言って、異常なほどの戦果を挙げているからこそ、このような、あまり人には言えない事を頼まれる。そんなんだったら、特別手当を増やしやがれ、もっと装備を充実しやがれ、人員と補給物資よこしやがれってんだ。
一番欲しいのは、自由だけだなッ！！

■ ■ ■

「で、野郎二人で悲しくリアル中世ヨーロッパの旅かよ……」

「……少なくとも仕事だ、私語は慎むように。」

「……」

ここは……。……。あー、ちょっと機密の関係上某国の某都市と仮定していただきたい。

どうも、総力をあげて調べ上げた結果、行方不明になった魔術師はすべてこの街に寄っていた。という、情報だいもんりきやがあつて、内務省の新たに新設された、内務省特別捜査課の大門力也という人物を助つ人と共に今回の魔術師失踪事件について、現地で捜査をしている。

しかし、この大門力也という人物、異常である。

以前、顔合わせといういみで彼とあったが、濃いグレーのスーツ姿

で赤いネクタイ中には黒いシャツで、周りはつばで囲まれた帽子をかぶっている。しかし別に顔を晒したくないというかんじではなく、顔ははつきりとわかった。だが、どこかひどい怪我でも昔負っていたのか顔は右から三分の一程の位置から盾に縫った跡があり、そこから右は少し肌の色が違っていた。

そして左手首には、向こうの言葉を自動翻訳してくれる魔具があった。

勿論、自分も手首に魔具がある。

雰囲気から察するに、異世界関連以前からこんな厄介事片づけて来たんだなあ、と思わせた。

「やっぱり、向こうの世界の都市にしちゃあ、ずいぶんと活気があるなあ。」

「露天商も至る所に二畳ほどの隙間があれば、我先にえと、店を構えているな。」

最初、ダメもとで振ってみた話題だが、反応は悪くないようだ。

「ああ、それはな。ある制度によってだからこそ。このような光景になっているんだよ。」

「ほう・・・実に興味深い。」

「この領主は、農民に対しては取れた作物の半分を徴収するという制度がある。これは、悪天候により不作となった場合にも適用される。」

「ただでさえ少ない小麦を半分にしたら、農民達は死活問題になる

のでわ無いのか？」

これには、力也も疑問符を浮かべる。

「実は、こういう風になった時の対策がこの地方にはあつてだな・
・ なんと、その小麦から酒を作つても良いらしい。」

「ほう・・・」

「他にも、パスタ、家畜の飼料なども税の対象になる。もし小麦自体が少なくても、その加工を請け負えば、それらは徴収される小麦の量より少なくて済むんだ。」

「それはよい、だがそうすると富裕な農民層は力を着けていくのではないのか？」

そう、反論した大門。なかなか乗ってきたようである。

「そこで、徴兵令で労働力を奪うのさ。広大な畑があつても、耕さなければ意味が無い、それをするための労働力がなければ土地を手離さなければならぬ。」

そこで、自分より少し格下の家族に土地を売るわけだ。

そこで、一時的に金はあるが、田畑は縮小され、収入は激減、しばらくして徴兵された人が帰ってくると、収入と収支の関係により赤字になりある程度の貯蓄になると、一番裕福な農民が兵役に借り出され、一部土地が帰ってくる。」

「だが、兵役借り出された奴が戦死すると結局金が手元に残るものではないのか。」

大門からのさらなる反論に対して

「それは、簡単な事だよ。

統治者側は、農民に対してこんな法を作ればいい。

『たとえば、金があろうとも貧しき人びとの労働力と資産を買い叩いてはいけない』とね。

それに、このあたりは行商が多い、それを利用して、優先的に農村を回って営業するような法を作ったんだ。

勿論、農村に生活必需品なんてものは売ってません。ぜんぶ農村に回っていく様の行商人にやらせます。」

「そして、行商人達はそこで手に入れた特産物や金を使って、さらに売れそうなものと調達し、この都市で売るんだ。露天商になるには、軽い税金を払えば、できるしね。」

「農民はまさに生かさず殺さず・・・だな。この時代でこのようなシステムを作り出すとは・・・ここの統治者は名君であろう。」

まさに関心といった表情をみせる大門

「まあ、以前ここを制圧したとき、ここの統治者は暴君だったらしく、農民や商人の力を借りて、いろいろな場所で一斉に反乱をおこしたんだ。」

「で、以前の反省点を踏まえて、こうなった訳だ。」

「流石、この世界に精通していることはある。私は荒事専門なのでこういった物には少しばかり疎い^{うと}のだ。」

「へえ、まあ。当分の間ですが、よろしく願いします。」

■ ■ ■

「で、ここが。失踪した術師がかき集められてる場所か？」

「ずいぶん大きな洋館だ。」

街で、色々聞き込みをしてきた結果、どうも都市の郊外にあるとある魔術師の洋館が怪しいという結論に行き着き、今は入り口を探すために洋館の周りを歩いている。

一応、表向きは事情聴取に向かう為にいくので、今は自分は戦闘装着セット（戦闘服・鉄帽・防弾チョッキのこと）で、大門は前述の格好でいた。

「お。あそこに門があるぞ。」

「開いているようだな・・・そのまま進むか？」

と、問いかけたその時

「や、やめろオー!!」

「いくぞー!!」

悲鳴が聞こえたのですぐさま門を通る事に、そして門を通り抜けた先には・・・

「アゝ」

と屋敷の大きなドアの前の庭で何者かが、悲鳴を發した魔術師に腕

を振るう。

「アアッ……」

魔術師は力無く倒れてしまった。

そして、後ろにいる二人に気がついたのか、そいつはこっちに振り向いた。

「……まったく、冗談じゃない。」

「正当防衛は成立だな……」

そいつはゾンビのようでゾンビでなかった。

皮膚は全部真っ青で、ところどころ腐敗はあり、腹部からはわずかに腸が見え隠れする。

自分は、即座に45口径（0.45inch）型拳銃USPを取り、奴に発砲する。

弾は額に命中、やはり予想通り若干腐敗しているようで、頭部の四分の一ほどが消し飛んだ。

だが、ここからが予想外、奴はまだ生きていた。

しかし、大門が銃を撃ち、奴の頭の残りに当てた。

流石に、頭部の四分の三を持って行かれては活動は出来ないらしく、そのまま緑の液体をぶちまけながら倒れて、コポコポを泡を立てながら溶けて、緑の液体になった。

「ゾンビや、死霊じゃない。」

「おい、大丈夫か!？」

驚愕する自分に。

虫の息状態の魔術師につめよる大門。

「仲間を・・・助けてくれ・・・」

これが彼の最後の言葉であった。

そして、周りを見ると、彼の他に数人の魔術師の死体がちらほらとあり、みな赤い血溜まりが出来ている。

普通、アンデッドは生きてる物を殺し、その肉を己の糧とするか、自分たちの仲間にするのだが、どうやらそういうわけではなさそうだ。

バイオハザードやその他ジョージ・ロメロ的ゾンビ映画（奥代の入れ知恵）や某美少女版バイオハザード（これは安松の入れ知恵）では無いらしい。正直、嬉しい。

その間に、他のゾンビモドキがこのことやってくる。

その両手には、手斧があるが近づくまもなく大門の拳銃によって胴に一発目、胸が挟れる。二発目さらに肉が飛び散り、三発目で胸に10センチ程の大穴が空いて地に伏して緑の液体に液化した。

「こいつは・・・」

「とにかく、屋敷に入る必要があるみたいだ。」

そう言いながら、拳銃の弾倉を交換している。

・・・、44オートマグナムなんてゲテモノ使ってる奴なんて初めて見たぞ・・・しかもグリップ伸ばして装弾数を無理やり伸

ばしてやがる・・・当時、オートジャムなんて呼ばれた欠陥銃なのに・・・

あれだけ軽快かつ快適に動作していることから多分、中身は全部オーダーメイドでやってんだろうな・・・

一瞬、脳裏に『見よ！我輩の誇るこの銃をッ！ 名付けて、アイゼルン・鉄血帝ライヒ国ルガーススペシャル！！（以下略）とかいつてる奴を思い出したが、『こんなもんはな、撃てて当たりやいいんだよ』と言って撃ち殺しておいた。うん、命中率は重要だね。

「ん？ 鍵がかかっているか？」

「ちよつとどいてる。」

大門を後ろに下がらせ、自分はドアノブにPAM！PAM！PAM！と撃ち込み、そのまま左足で鍵の壊れたドアを蹴破る。

中に入ると、前方にはまたドアがあり、そして左右には階段があり、二階部分には来客を見下ろせるように壁が取り払われ、手すりになつていた。天井には質素なシャンデリアがあつた。

「イー、イー」

二階から、何かサルのようなものがそのシャンデリアに飛び乗り、それと共に落ちると、我々に襲いかかる。

PAM！PAM！

「イー・・・」

すぐさま、左にいたサルを倒すが・・・

「イー、イー」

右のサルは右側の階段を上り、逃げていった・・・

「追うぞ。」

大門ともに追いかけるが、ぐんぐん距離を離される。そして、階段を登った先には、ゾンビ（略）が三体。

「ア、アア」

最前列のゾンビが腕を振るう前に頭を撃つ。

「アゝゝ・・・」

そのまま倒れ、大門が残り二体を撃つ。

一体は頭がとれ、もう一体は右腕がとれる。

そして、トドメに自分が腕のない奴に一発、頭に撃ち込んで倒れた。相変わらず、緑の液体に液化している。

「く、来るな！」

悲鳴の方に向けると、先程のサルが生存していた魔術師に襲いかかろうとしていた。

B A N !

「キゝキゝッ・・・」

大門が一発撃つと、サルの頭に当たりその場で絶命した。
魔術師はこちらに向かい

「ありがとう。この先に仲間がいる。助けてやってほしい。それと、君たちの他にも仲間が来ていた。彼らもこの先にいるだろう。」

といって去っていく。

「仲間？」

「我々の他にも、この任務を受けた奴がいるようだな。」

なんだか、死亡フラグにも見えなくも無い気が・・・

「では、行くぞ。」

また、弾倉の交換をしていた大門が、二階の奥の扉を開けていく。
自分もまた残弾を確認し、彼の後に続いた・・・

■ ■ ■

その後も行く手を阻むゾンビモドキを倒しながら奥へと進むが一向に変化はない、あったとしても・・・

「しんでるぜ」

一足遅かったのだろう、たちよった部屋の一角で、無残にも首の噛傷から大量に血を流している魔術師の遺体を発見した。

恐らく犯人は先程こいつの近くにいた、ゾンビモドキだろう。
もう、撃ち殺したが。

「ぬ、錠がかかっている扉があるぞ。」

といい、オートマグを2発撃ち込み、錠を破壊する。

「デエアッ！」

そしてそのまま右足で蹴破る。

扉の先にはまた廊下が前方に伸びており、その先には自分たちに肩を向けている、迷彩服の隊員が3人がいた。恐らく、先の魔術師が言っただけらの一部だろう。

にしても、妙に焦っているようにも見えない。隊長格の人間がいないようだが・・・

自分たちは彼らと合流するべく向かった。

「何が起こった?！」

「・・・ッ!! た、隊長!! 助けろ」

隊員の一人が64式小銃を撃ちながら、こちらに助けを求めようとしたが、壁ごとぶち破って飛んできた何かによって残りの隊員も含めて、吹き飛ばされた。

「!!」 「!!」

飛んできた何かの正体を見て、焦った。

それは、一般的に言う肥満な体系ではあるが、そいつは身長が自分二人分の身長、すなわち三メートルでありボロいズボンを履き、皮膚は黒緑で、顔は電気椅子に座らせるような感じの黒いゴム状な物

で覆われて、鉄仮面のような物をつけており見えない。それは鎖骨当たりにもまで伸びており、ずり落ちない為なのであろうか釘が打ち込まれ固定されている。

足腰や腕は自分の胴体程の太さがあり、異世界補正が入っていたとしても、おおよそ不可能な体つきをしている。

しかし、ぐったりしている辺り、もう先程の一撃で絶命しているようだ。

「こいつ しんでるぜ」

「いや、まだ終わっていないぞ。」

大門が言った瞬間、メタボが飛んできた方向から、そいつと同じ奴が出てきた。

そして、俺達を見るなり。

「オオオオオオオ！！」

と、叫ぶ。

ごめん。全然バイオの方がマシでした。ここマジで危機的地域だ。TMPと防御楯持って来い。戦車だろうが、アパッチだろうが、偏光ビーム搭載のボートだろうが相手になってやる。

しかし、現実は厳しく、そいつはゆっくりとこちらの方に歩いてくる。

「う、撃つぞ！！」

自分は悲鳴に近い声をあげながら、奴に撃ち込む……が、いままでのゾンビモドキと異なり、全く歯が立たない。

「攻撃が効かないだと?!」

大門にも焦りが生まれる。

自分たちは半ばヤケになって奴のいろいろな部位に撃ち込む。

胴体は勿論、皮膚の露出している足・腕・肩あるいは股間にも撃つたが効果がなく、先程の部屋のドアまで後退していたが、ドンドン距離が縮まっていく。

もし部屋に逃げたとしても、壁をぶち破ってここまで来ることは簡単に予想出来るだろう。

もう完全にヤケになって、防護されているであろう顔を撃つ

「オオウツ・・・」

なんと、少しひるんで後退したではないか。

「顔面が弱点か？」

大門が呟く。

人間とはパニックになると判断力が鈍くなるもので、普段の自分達なら即座に奴の顔を撃っていたのだが、このような異常な状況下ではこのようにてこずるのである。

しかし、ひるんで少し後退したとはいえ、本当に少しだけであり、まだまだ距離は近い。

弾倉の再装填を済ませた後、とにかく奴の弱点である顔面めがけて撃ちまくる。

「オウツ、オウツ、オウツ・・・」

連続で弱点を撃ち込まれば流石のメタボもたまらないようで、ある程度喰らうと、距離を離し、壁をぶち破った所まで後退した。

「オ、オ、ー！！」

そして、その場に転がっていた奴の拳位のレンガの塊を投げつけてきた！！

「ここでは満足に避けれん。撃つぞ。」

んな馬鹿な。と思ったが、背中を見せては最後・・・な予感がしたので、もうずっとヤケになってるが、塊を撃つ。

するとどうだろうか、塊は弾道を逸れ、壁や床・天井などに当たり失速、防ぐことができるではないか。

なんだかんだ異世界でいろいろな経験をつむと、自分達現代人でもレベルは上がるんじゃないか。

と、思いながらもレンガを撃ち落とし、余裕があればメタボ野郎に追い討ちをかける。

野郎の顔面に取り付けられた鉄仮面はボロボロになっていき、ところどころ緑の液体を垂れ流しだんだん動きもレンガを投げる速さも緩慢になっていく。

「オ、オ、ー！！」

やがて、イラついたのか、メタボは叫びだし、前に屈んだ状態になる。

「ん？ 何をする気だ？」

「不吉な予感がする・・・」

自分も大門もソレをなんとなく察し、弾倉を再装填した。
そして、何が起こつても良いように奴に銃を構えておく・・・

「オォォー！！」

そのあと、やつは片方の肩を前に突き出しこちらに向かって走ってきた！！

奴はあの巨体で突進してきたのだ！！

「頭を撃ちまくって、阻止するんだ。」

「悪足掻きを・・・ッ！！」

悪態をつきながらも、頭にありつたけの弾丸を撃ち込む。
奴がいた場所からこつちまではあと50メートルッ！！

「グォ、グ、グォ・・・」

元々、体力が切れていたのだろう、だが緩慢ながらも最後の力を振り絞るようにして、こちらに向かってくる。

そしてあと25・・・20・・・10メートル・・・ッ！！

「グ、グォォォ・・・」

ドスン！！ という音と共に軽く地面が揺れる。

奴は仰向けに倒れたのだ。

鉄仮面は見事に破れ、ところどころむくみ、ただれ、筋組織がむき出しの状態の醜い顔を晒した。

メタボの横を通り、吹き飛ばされた陸士の元へ駆け寄る。

「大丈夫か！？」

「うう、これを・・・」

見た目からしてもう助かりようもない陸士から貰ったのは一つの羊毛紙を束ねたノートのようなものであった。

「これで・・・奴ら・・・弱点の・・・ヒント・・・・・・・・」

「おい！！　しっかり！！　しっかりしろ！！」

「あとは・・・・・・・・頼みます・・・・・・・・ぐふっ」

これが陸士の最後の言葉であった。

だが、悲しむ暇はない。大門の方も他の陸士の遺言を聞いていたように。

「最深部に気化爆弾を仕掛け、一気にあのゾンビ共を一掃するようだ。」

と、言っていた。

そして、陸士に託された羊毛紙の中身を見ると驚愕の事実が・・・

「馬鹿な・・・アンデッドを有効的に兵器にする魔術師!？」

「そして、強力かつノーリスクな生物の開発!？」

それには、数が増えず、自由に使役でき、どんな物よりも強いスーパーアンデッドを創りだす計画であった。

確かに死霊使いといって、ゾンビを創りだしたりすることはできるが、これは我々の世界で言うところの核兵器や生物兵器のことであり、すべての人々は自らの文明を破壊しないためにも、封印された破滅の術。

どこも、人は同じような事をする訳だ。

要は現代風にすると生物兵器を改良して生物毒素兵器に作り替えるってしるものですな。

ただ違いを言うならば、異世界の方が遥かにヤヴァイ代わりにそれが使えたり、知ることが出来る人間が少ないってことか。いや、もう殆ど無いと言ってもいいかもしれない。

「自分に世界を救えとでも言うのか・・・」

冗談じゃない。こんな安い給与で世界が救えるかってんだ。

「しかし、やるしかない。」

「わーってますよ。」

死んだ陸士から遺品で、奇跡的に損傷の少なかったショットガンを頂く。しかし今時SPAS12だなんて・・・12発しか無いなんて・・・死にたい。

因みに大門は焼夷手榴弾を遺品の中から頂いた。

「俺、この任務が終わったら・・・」

「黙っている。」

さて、次回。

異世界自衛隊黙示録03（後書き）

今回の話：セガのアーケードガンシューティングゲーム HOD
『ザ・ハウス・オブ・ザ・デッド』『THE HOUSE OF T
HE DEAD』を半ばパロったもの。

大門力也：元ネタ ZOMBIE ゾンビリベンジ REVENGEの毒島力也を
パロったもの。リアル思考で気功術は無し。

この話の大半はこの二つで成り立っていると言っても過言ではない。
実際、殆どこの二つの設定（？）に似せてるので・・・
前述のHODと同じ世界観らしい・・・

某美少女版バイオハザード：元ネタ ハイスクールオブザデッド
（HOD）の事。これは自分の独断と偏見、いい呼び方があった
ら教えて。取り替えますんで。ファンの皆様は申しわけございませ
ん。いや、ホント。

それとさっきのHODの文字でこれを連想した人素直に手を上げな
さい。

先生怒らないから。

ここマジで危機的地域だ。TMPと防御楯持つて来い。戦車だろ
うが、アパッチだろうが、偏光ビーム搭載のボートだろうが相手に
なつてやる。クライシスゾーン元ネタはCRYSTIS ZONEナムコのアーケード
ガンシューティングゲームのTIME CRYSTISの外伝。
戦車、アパッチ（戦闘ヘリ）はアーケードで戦えるが、偏光ビーム
搭載のボートはPS2でしか戦えません。悪しからず。

見よ！我輩の誇るこの銃をッ！ 名付けて、アイゼルン・ライヒ鉄血帝国ルガースペ
シャル！！（以下略）元ネタ：ブラックラグーン
単行本第二巻に登場。ネオナチ編の後半に登場。
知る人ぞ知るあの人、ブリッツ・スタンフォードさんの一世一代の
一発ギャグ。
せつかくだから『CV：せいじろう』全文逝っちゃうと

「見よ！ 我輩の誇るこの銃をッ！ 名付けて――
アイゼルン・ライヒ鉄血帝国ルガースペシャル！！
ルガー・アーデyllary（砲兵）・ロングをベースにフレームは硬
質カーボン！
グリップを太く！ お得なダブルカラムマガジン（複列弾倉）を収
容し――

マン・ストップピングに優れるというには余りにも絶大な破壊力の4

54カスール仕様！

この恐るべき銃を撃てるのは地球広しといえどこの我輩だけよ！

恐いか？ そうだろう！！ 怖くないハズがないッ！！

この威力しかと目に焼き付けて死ねッ！！」

・・・うん。お分かり頂けたであろうか。

『もはやコピペで使っても良いレベル』なんです。

454カスールは殆ど獣用（熊とか）じゃねーか。

原作で見て笑い、アニメでも見て笑え、素人が見ても生粋のガンマニアが見ても笑えると自分は思ったり。

あ、あとロットン・ザ・ウィード”のある場面も原作で笑え、アニメで笑えなので一見の価値アリですよ。

ま、一番面白いのはブラックラゲーンの本筋だけだね！！

あとがきのあとがき。

つい、夜中まで起きていたので、興奮して一日で書き上げてしまった・・・

興奮が収まった後、読み直すとかかなりヤバげな予感はあるが、消すのも勿体無く感じてしまったので、渋々投下といった形に・・・

しかもまだパロツた部分あるし・・・
やばければ、消すし。ダイジョブだったら残すって形にする予定。
以上。

ついカッとなってやった、反省は（ry（前書き）

本編はチマチマ書いてます、つーか生きてます。

ぶつ切り投下はあまりにもアレなので全然投稿してませんが……

真面目に書くより、こういう寒いギャグに走るのだけは成長しちま
って……

ついカツとなってやった、反省は（ry

青木と茶々畑の違い

- ・苦勞が絶えないのが青木 氣苦勞が絶えないのが茶々畑
- ・有名大出なのが茶々畑 防衛大出なのが青木
- ・女に恵まれないのは青木 女運に恵まれないのが茶々畑
- ・災難に遭うのが青木 女難に遭うのが茶々畑
- ・同僚が濃いのが青木 同僚が薄いのが茶々畑
- ・茶々畑はベタな発言をするが、青木はメタな発言をする
- ・墓場に片足突っ込んでいるのが青木 人生の墓場に片足突っ込んでいるのが茶々畑
- ・特殊作戦群にねじ込まれるのが青木 特殊な作戦にねじこまれるのが茶々畑
- ・異世界にいるのが青木 別世界にいるのが茶々畑
- ・金額の単位を確認してヒヤヒヤするのが青木 大学の単位を確認してヒヤヒヤするのが茶々畑
- ・茶々畑は口説き文句を吐くが、青木は悪態を吐く

全盛期の青木伝説

- ・ 1日8戦闘は当たり前、1日12戦闘のときも
- ・ 行軍中での暗殺を頻発
- ・ 青木にとって暗殺は奇襲・強襲の成りそこない
- ・ 戦闘開始早々に待ち伏せに遭うのも日常茶飯事
- ・ 戦力差10：1での防衛戦の中、無事防衛に成功
- ・ 後方待機中にも余裕で奇襲に遭う
- ・ 戦闘がない移動中にも盗賊に襲われる
- ・ 友軍の近くにいるだけでその指揮官が泣いて転属を申請、胃潰瘍を起こした指揮官も
- ・ 一睨みしただけで矢が飛んできた
- ・ あまりに待ち伏せに遭うので最初から敵軍の待ち伏せ場所にいた時期も
- ・ マスコミのヤジに反論しながら、指示を飛ばした
- ・ グツとガッツポーズしただけで敵の増援が来た

- ・ 異世界ファンタジーが出てきたきっかけは青木の防衛大卒業
- ・ 青木には「死亡フラグ」が見えていたらしい
- ・ 名指揮官は戦いの流れが見えるというが、青木は特にそんなことねーです
- ・ 青木を捕まえればその戦闘は勝ちという暗黙ルールはもはや伝説
- ・ 青木を討ち取ればその戦争は相手の勝ちという破格のルールも達成されたことはなかった

ついカッとなってやった、反省は（ry）（後書き）

茶々畑より青木の方が動かしやすくワロタ

でも青木すぐに空気になりすぎワロタ

ちなみにこいつらを自己評価すると

茶々畑〃>中二病乙

青木〃>大二病乙

結果〃>妄想乙

異世界自衛隊黙示録04

今日も今日とて、書類と戦う異世界某駐屯地司令官・青木勇介

「司令官、次は銃殺すつぞ。」

だが、彼の敵は書類だけではなかったッ！

「害獣退治って……ギルドにでも任せろよ……」

駐屯地から軽装甲機動車やトラックで飛ばして約2時間。日本と違い異世界には渋滞や事故や一般車両や、高速道路やら舗装された道路すらない。だから田舎で走ってるのとあんまり変わりねーです、はい。

大体200〜300キロ離れた森林地帯に、害獣が異常繁殖により付近の住民に被害が出ているとの事。駐屯地司令官以下、衛生科を加えた一増強小隊は害獣討伐に参上なすったのだった……ハンター仕事しろ。

「これが、青木勇介三佐最後の言葉になるとは誰が予想できたであろうか。」

「テメーはちょっと黙ってる。」

指令殿にしこたましばかれた。

「奥代、パワーハラスメント現在進行形で発生してる！」

「お前は少しは自重という言葉の意味を知るべきだ。」

最近の奥代は容赦なくてこまる

「ごめん、反省はしても自重はしない主義なんだ。」

「そんな大人、修正してやる！！」

そして指令殿直々に社会の荒波に揉まれている自分、名前は安松康弘。

異世界ファンタジー出現というナイスな事件にホイホイ釣られ、ソッコーで大学の単位取って自衛隊に入隊したら即これだよ（笑）さらに追い打ちをかけるようにその大学にリスト王国の貴族や魔術師を留学させていた事実が発覚し、刻の涙をみたのはつい昔の事。一応、除隊後研究員研修受けるがな！！

周りの同僚は「ああ、またあいつか……」といった表情をしていて、とつと装備整えて展開してた。

「衛生科ー、衛生科あー負傷者、負傷者がでたぞー」

「自然治癒で十分だろ。」

衛生科も最近自分をギャグキャラか何かと思ってやがる……ッ！

「いや、事実そうだろ。あと、本音がダダ漏れで声に出してるぞ。」

え、マジかよ。

そして奥代に言われた通り、傷が塞がってきている辺り理不尽を感じる。

「ミズラちゃん、負傷者一名。治療お願いするでゴザル。」

「あ、あははは……もう傷塞がってますよ、完全に。」

ぐぬぬ……なんという、なんということだ!!

・ ・ ・ ! ! ! ! !

閃いた!!

「これが主人公補正か!!」

人目のつかない所で殴る蹴るの暴行を受けた。

「いったい僕が……僕が何をしたって言うんだッ!!」

「今のは自業自得だろ……」

でもすぐ復活する、不思議!!

そして、数分後……

そこには、全長3.5メートルの巨大狼に元気に追われる安松の姿が!!

「もう、馬鹿な事なんて言わないよ。」

俺は食っても美味しくねえから!! むしろ食ったら身体中の穴という穴から紫の液体(弱酸性)をまき散らして死ぬから!!

「ええい、鬱陶しい。」

といって、89式を撃つも射線から器用に巨体を動かし、当たらな

い。

「クソ、個人消費目録に追加することになるが致し方無い。」

閃光手榴弾のピンを抜き、しばらく料理した後に犬コロに向かって投げる。

鳴り響く高周波音と閃光。もんどり打つ犬。

そこに容赦なく、89式を叩き込み、目標を沈黙させる。

「うーん、討伐手当でノーカンかねえ……？」

いつだって命は大事だが、時にはお金も大事なんです、はい。

「安松ウ！！ 無事か！？」

おっと、駐屯地司令殿と奥代達が追いついたか。

「すまん、お前だけ狙われた時、丁度あいつらの群れが来てな……その対処に追われていた。」

いつも事でしょ、いいですよ。

「狼から逃げきって、単独撃破……流石だな。」

犬コロの死骸をみて感心する奥代
ま、一匹ぐらいなら大丈夫さ。

「あれ？ こいつ俺達が相手してた奴より体大きくね？」

ある陸士が仕留めた獲物の異変に気づく

「そういえば、そうだ。我々が相手にしていたのはせいぜい2メートルだ。」

「つーことは、群れのボスカね。頭が居なくなればしばらくなりは潜めるだろう。よし、写真とってギルドに報告！！任務終了だ！！」

あれ、駐屯地司令マジですか……

マジですか…自分も青木三佐と一緒にいましたからねえ……

「まあな、ここでは色んなことがあった…ありすぎた……」

奥代が同調するように言う。

「ああ、だが……五体満足に生きて、出世して……まあ、悪くはないんだけどな……」

だが、書類とデスマは勘弁なと言う三佐。
その時は手伝いますから…ね？

あ、そうそう。言うことあったんだ。一言言っただけか？お二人さん。

「ま、いいだろ。」

「碌な事では無いと思うが……」

発言許可を頂いたので、せっかくだから……

「先程、もう馬鹿なんて言わないよといったな……？」

「あれは嘘だ。」

親玉の仇と言わんばかりに巨大狼（手下）との集団エンカウントした。

これはひどい。

異世界自衛隊黙示録04（後書き）

キャラの紹介。

今日も今日とて彼らは雑用に走る。

ぶっちゃけ作者のキャラとか掛け合いのド忘れ防止用。

異世界自衛隊黙示録05

唐突だが本来、中世レベルの文明に戦車なんて物は”ほぼ”不要である。

もし、それらが必要とされる時は魔道士が造り出したゴーレムが大量に発生した場合や、市街戦の時などである。

その場合の時でさえ主に榴弾を使い、徹甲弾などを使うのはそうそう滅多にない。

なにせ相手が軟らかすぎるのである。市街戦では硬くてもせいぜいレンガや石程度であり、鉄もこの世界ではあんまり品質はよろしくない。

文明レベルの割には冶金技術は当時の中世以下という不思議現象、理由は実に簡単。

魔法の存在である。

都合よく武器・防具の強化魔法なる物が存在しており、これが冶金技術のカバーになっているとの事。魔法パネエ。

しかも、金属よりモンスターからとれる素材がありえない性能なのだから、ナイフレベルの牙とか爪とか。ファンタジーパネエ。

そりゃ、冶金技術も進歩が遅いや。

さて、話は逸れたがこれらの事柄は全て人間に限った時の話である。ここは中世は中世でも中世ファンタジーなのだ。我々の常識など投げ捨てるものでしかない。

……つまり、自分は何がしたいのかというと……

「竜退治はもう飽きた。」

真上に太陽が輝く中、荒れ果てた荒野を走るのは鋼鉄の騎士、戦車。それも1中隊分+整備・補給の人達。整備・補給方には歩兵は付いているが、戦車中隊の方は随伴歩兵も航空支援も何も無しというふ

ざけた状態である。いくらファンタジーでもこれは許される事じゃねー、みんなファンタジーに当てられてバカになったの？アホになったの？

いくら命令とはいえ、これは御法度すぎるだろ……常識的に。

そもそも、異常繁殖した地竜が行けないんだ。なんで、アフリカゾウサイズがこんなナンも無さそうな荒野で馬鹿みたいに繁殖してんの？ テリトリー広げるはいいいけど、こっちの管轄にくるんじゃない。進路方向に村あるんだよ畜生が。

と、74式戦車の本部車両の中で機甲科の同僚と色々打ち合わせなどをしていた。

「ロクイチより、報告。地竜を確認しました。」

「こちらロクニイ、地竜発見。」

「ナナイチ、オオトカゲを目視で確認。」

ぞくぞくと、小隊から連絡がはいる。

ざっと確認したところ20匹程の地竜がいるようだ。

「目標、地竜。弾種榴弾、撃ち方始めー！」

ハッチから見た、総勢16機の戦車による砲撃は中々爽快な光景であった。

目の前に見える地竜……アフリカゾウクラスの全長を持つ、大トカゲはバンバン撃破されていく。

刀剣類では傷つくのは容易ではなく、対魔法防御もそれなりに兼ね備えた鱗や甲殻に105mm砲や90mm砲が劣る訳も無く、次々

に地竜を撃破していく。

「目標を撃破、撃ち方やめ。」

「さて、地竜はまだまだいるそうだから、どんどん撃破だ。」

地竜という名のオオトカゲの駆除が始まり、途中、休憩と補給を挟みながらも撃破数が三桁を超えた辺りの事であった。

きっかけは、休憩途中の時にふと漏らした一人の陸士だ。

「なあ、ここでならドラゴンステーキ食えるんじゃないネ？」

「なん……だと……？」

隊員達に衝撃が走るッ！！

陸士は続ける。

「大体さ、こつちにきてからは戦闘糧食しか食って無かつたろ？
青木司令は何回か貴族様の飯を食ったらしいが、日本に帰ったらそれ以上物は食えるって断言してたし。」

「普通はいいもん食いやがってクソ上司……といたいのが、あの人
はなあ……」

司令官殿（笑）に同情の意を示さざるをえない一同であった。

「まあ、それは置いといて……だ。」

やけに真剣な目付きになる陸士。

同僚も思わず息を飲む……

「ドラゴンステーキ……食べてみないか？」

陸士達は無言で首を縦に振った。

■

「ロクイチより、報告。地竜発見!!」

「こちらロクニイ、地竜を確認!!」

「ナナニイ、地竜を確認!! 攻撃許可を求む!!」

また地竜が確認されたが、さつきから物凄い意欲にあふれている？
こいつらもファンタジーに当てられたか……

「…目標、地竜。弾種榴弾。撃ち方始め！」

若干引き気味で命令を飛ばす。

「榴弾撃てー!!」

「発射!!」

「ヒッパァー新鮮な竜だー!!」

一部発言がおかしいが特に問題なく撃破していく。

「撃破確認。」

「撃破しました。」

「クソッ！！アイテムドロップしねえか。」

一部いい感じに壊れ始めたが無害なのでスルーする。

「……地震だ！」

揺れる車内、地震慣れしているといわれる日本人でも恐怖を感じるレベルの揺れが来た。

「デカイ地震だな……」

「……？何かが近づいてくるッ！！」

僚機に乗っている、誰かの陸士が呟いた瞬間、あの竜竜サイズの二倍程の大きさを誇るオオトカゲが地面をたたき割るように我々の近くに飛び出してきた！！

「あ、あれは……」

「群れのリーダーって事が……」

一部は「ヒッターボス戦キター」や「ヒッター、新鮮なドラゴンステーキダー！！」と言っているが、ちやっかり車載機銃であるM1919A4機関銃や74式車載7.62mm機関銃を撃ち、車両をバックさせて距離をとっている。……が、このオオトカゲには7.62mmではあまり効かないようだ。

そしてオオトカゲはそれに怒ったのか、口から煙のようなものを……

「いかん！！車内に対比しろ！！」

自分の焦った声に事の重大さを理解した陸士は素早く車内に非難しハッチを閉めた。

その瞬間、オオトカゲは口から火を吐き、小隊名ロクニイとナナイチが炎に包まれた。

火炎放射はすぐに止み、一部シャシーが焦げたり、側面が少し燃えている。どうやら、可燃性の液体は吐き出しているのだろう。

「た、助かった……」

コンバットハイから醒めた陸士が安堵の声を上げる。火だるまになるのは誰だって勘弁なのは当然だ。

「こちらロクニイ。全機問題ありません。」

「こちらナナイチ、三号機の機銃破損しました。それ以外は問題ありません。」

「くそう、目標、巨大地竜！弾種榴弾！反撃！」

61式戦車と7

4式戦車の 攻撃！

105mm砲と90mm砲から

榴弾を 発射！

カン！

巨大地竜は

ダメージを 受けない…

巨大地竜は
いきなり体を 反転させ
尻尾を ぶつけてきた！

61式戦車は
激しいショックを 受けた…
シャシーが 破損した…

「こちらロクイチ、四号機のシャシー破損！」

「榴弾では効かんか…：弾種を徹甲弾に変更。目標、巨大地竜…：撃て！」

61式戦車の 攻撃！
巨大地竜は
激しいショックを 受けた…

74式戦車の 攻撃！
徹甲弾を 発射！
改心の 一発！！

「距離をとって戦え」

「ロクニイ。距離が近いぞ、後退せよ。」

「目標、巨大地竜。距離150、弾種徹甲、撃て！」

「うお、また火を吐きやがった。」

「デカイ図体のくせに動きまわりやがるぜ。」

「木っ端微塵にはするなよ、アイテムがでねえからな。」

榴弾の破片では深い傷を負わせることが出来なかった巨大地竜の甲殻は徹甲弾によって食いちぎられていく。

「あいつ、性懲りも無く突っ込んでくるぜ!？」

「撃ちまくって食い止める!！」

「オラオラア! とつと落ちやがれえ!！」

61式戦車の 攻撃!

徹甲弾を 発射!

巨大地竜は

激しいショックを 受けた…

61式戦車の 攻撃!

巨大地竜は

ダメージを 受けない…

巨大地竜は

口から火を吐いた!

しかし失敗した

74式戦車の 攻撃!

徹甲弾を 発射!

改心の 一発!!

74式戦車の 攻撃！

徹甲弾を 発射！

巨大地竜は

激しいショックを 受けた…

再び反撃を試みる為なのだろうか、こちらに突進していかうとするが、砲撃によって見事に完封。やがて力尽きた。

「目標、沈黙。撃ち方やめ。」

損害は負傷者無し、戦車の損害は軽微……なのだが、このような原生生物相手にこの損害は大変よろしくない。

後日、報告書や始末書・予備の部品の補充の為の書類作成が今ここで確定した瞬間であった。

かけがない人命の為には仕方が無い事である。

……無傷で切り抜けたかったなあ……

■ ■ ■

（注：一部抜粋したもの）

報告書

青木 勇介三等陸佐

今回行われた害獣駆除について

。月？日に行われた害獣駆除について

今回の害獣は現地では地竜と呼ばれる原生物。

平たく言えばオオトカゲであるが、一般の成竜のサイズはアフリカ象サイズにも匹敵する。

力は自動車程度ならば簡単に動かし、形を変えることができる。

護身手段に可燃性液体を吐き出し、何らかの方法で発火し攻撃する。火炎単体を吐くのでは無く、あくまで可燃性液体を吐き出すため、非常に危険である。

荒地に生息し10〜20体ぐらいの群れで行動し、草食動物の群れの大移動を狙い、襲う事が多い。

群れの中でもずば抜けて体が大きい物はリーダーで、一般の地竜とは危険度が非常に高いので、油断しないこと。

成竜ならば榴弾が理想的だが、小銃弾・擲弾でも怯ませることが出来る。

一方、リーダーには砲弾……徹甲弾クラス以上の貫通力を持った砲弾でしかダメージは与えられない。命中部位によっては極稀に90mm砲の砲弾が弾かれる事もある。

下手すれば、戦車が撃破されてしまうので、注意すべし。

対策としては、基本距離とって戦えば問題ないが最善策はとにかく戦車をぶつけること。

リーダーには最低1小隊分の戦車をぶつけなくては安全とは言えない。

今回駆除した、地竜のリーダーは現地ギルドのお尋ね者だったらしく、金貨250枚が賞金として進呈された。

これについての処理を検討願いたい。

追記

地竜の肉は固く、脂肪が無いに等しいが、現地の食材としては大変美味しい物であった。

一部を冷凍保存して本国に送るので、栄養価などの調査を求む。

また、調理法や食べることの出来る部位などの情報を提供してくれた現地協力者に何らかの謝礼を贈るべきであると進言する所存であります。

ドラゴンステーキの誕生であった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3946o/>

異世界自衛隊黙示録

2011年8月23日20時54分発行